
帝王の血

一言 真

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝王の血

【Nコード】

N4594K

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

葉太はある日を境に血に染まったまがましい夢を見るようになる。同時に彼はある不可解な事件に巻き込まれていく。迫りくる非日常、うずく血。さまざまな奇妙な現象に遭う中、葉太は運命に立ち向かう。伝奇小説。

「帝王よ。人の血肉を献上しにまいりました」

ふと声がした。かすれ、しわがれた、声が。

視線を上げると、黒い影が揺れ動いて立っていた。全身、黒い毛に覆われ、月明かりに鈍くつややかに光るその毛は草のようにさやさやと揺れ動き、なびいている。

顔が見えた。人のそれではなかった。鈍く照り輝く黒い鼻。突き出た口、それを縁取る長い牙。頭にかぶさった茶色いたてがみ。

彼（、）は、長い爪のはえた手の平に血の滴る肉塊を載せて、差し出してきた。

「帝王よ、どうぞお召し上がりください」

見れば、彼の背後に、点々と血だまりができ、一直線に続いていた。その血だまりの先に、壁に寄りかかるようにして、人の影がある。

ちぎれた頭が地面に転がり、首の断面が晒され、その軀は壁を背にして傾いていて、こちらに足先を向けている。からだ

軀の胸のあたりに、大きく切り裂かれた跡がある。その深い傷は、中の臓腑をも突き破り、破れた皮膚からぶちまけられている。

彼が、やったのだ。彼が、その爪で、人の体を引き裂いたのだ。

「帝王よ。さあ、おあがりください」

彼の伸びた口から、くぐもった声が上がる。

差し出された肉塊を掴む。それを顔に近づける。生臭い血の匂いが鼻をつく。

口の中に唾液が込み上げて来て、口の端から漏れ落ち、顎を伝い、肉塊の上に落ちる。

透明の唾液が血と混じり合い、ピンク色の液体となって地面に滴り落ちて行く。

肉塊を顔に近づけ、それに歯をたてる。

しゃりしゃり。

口の中で、骨が砕け散り、肉が割かれ、血が舌の上に広がる。
もう一口食べる。生臭さが口の中に広がり、唾液をそそって心地よい。

もう一口。もう一口。

すべてを飲み干し、彼に視線を向ける。彼は牙のある口を斜めに歪めて笑った。

「帝王よ。こちらもどうぞ」

彼はもう片手にあった肉塊を差し出してくる。

それに飛びつくように両手で抱えると、それにかぶりつき食べるように食べたした。

血の濃い甘い味。どこか澱んでいて、血肉が混ざったまろやかな液体。

胸の底から歡喜が沸いてくる。血肉を貪りながら、咆哮する。
くれ。もっと。

血肉を。人の血肉を。

「！」

俺はがばつと布団をはいで起き上がる。何だ、今の夢は。

夢の中の光景が、生々しく頭に浮かびあがる。地面を染め上げる血。手の平に広がる生温かな血肉の感触。

俺は吐き気がして、口を手で押さえる。胃液が食道をせり上がり、喉まで差しかかる。俺はそれ进行とか押しとどめると、大きく息をついて深呼吸する。

とにかく、水を。

そう思つて上体を支える為にベッドに片手をつこうとしてふわりと手の平に柔らかい感触が広がった。

俺はなんだこの感触は、と横を見やる。そこに横たわっている姉ちゃんの姿に、俺は肩を跳ね上げる。

「うーん……」

姉ちゃんが呻きながら、布団を体にまきつけてみのむしのようにくるまっている。俺の手の平は姉ちゃんの片胸の上に置かれていて、その柔らかい感触が、手の平に広がり、腕を伝って、頭の中に刺激として広まり、頭を沸騰させる。

「うわあっ」

俺は慌てて手を離す。豆腐のように柔らかでふつくらとした、弾力のある感触。手の平ではつかみきれず、端をはみだし、胸の鼓動と共にかすかに震えているその胸。

「なんで、姉ちゃん、こんなところで寝てるんだよ！」

その声に、姉ちゃんが薄眼を開ける。

「だって、葉ちゃんの布団、あったかいんだもん」

「とつとと布団から出るよ！」

「いいじゃないの」

姉ちゃんはすりすりはこちらに這い、近寄ってくる。

「わ、それ以上近寄るなあ！」

いきり立った股間を押さえながら俺は叫ぶ。

「いいじゃないの」

姉ちゃんは俺との距離をつめ、すつと腕をつかんでくる。股間が脈打ち、さらにいきり立ち、血気盛んに運動を続ける。

「近寄るなつてば！」

俺は姉ちゃんの腕を振り切り、ベッドから降りる。そうして掛け布団を掴んで、姉ちゃんから引きはがす。

ぼわつと掛け布団が舞い、姉ちゃんの全身があらわになる。制服姿の姉ちゃんは身を縮ませてベッドに横たわっていた。

ストレートの長い髪。窓から差し込む眩しい日の光に照らされてつややかに光り、黄色くきらめいている。

ぱりつとした白いワイシャツは、姉ちゃんのふくよかな胸を包んでふつくらと盛り上がり、スカートからは、艶めかしい足がすらりと伸びている。

俺は唾をぐくりと飲み干した。

すらりとした細い肢体。ゆっくりと寝息を立て、弾む胸。抱きしめると折れてしまいそうな華奢な肩。

俺は目を逸らし、「さっさと朝飯にするぞ!」と叫ぶ。

「いやあよ。葉ちゃんの温もりが残ったこの布団、気持ちいいんだもん」

そう言ったと同時に、姉ちゃんの腹がぐきゅうと鳴った。姉ちゃんがむくりと首を持ち上げる。

「お腹空いた……」

「ほら、言わんこっちゃない。いくぞ」

「起こして、起こしてー」

こちらに両手を差しのべて、甘えた声を上げる姉ちゃん。

「仕方ねえなあ……」

俺は姉ちゃんの腕をつかみ、引っ張って起き上がらせる。姉ちゃんは足を床につけると、満足そうに目を細め、ベッドから立ち上がる。

「さっさと行くぞ」

俺がぶっきらぼうに言うと、姉ちゃんは俺の手をつかんできて、

「うん!」と元気に笑ったのだった。

姉ちゃんは俺とは血のつながらない姉弟だ。親が俺たちが小さい時に再婚して、父さんと母さんにそれぞれ連れ子がいて、俺たちは出会った。

けれど、俺たちが小学生の時に、両親が交通事故に遭って、死んでしまい、この家には俺と姉ちゃんの二人だけが取り残された。それからというもの姉ちゃんが俺の世話を焼くようになった。

姉ちゃんは面倒見はいいんだけど、妙に俺にでれでれとすり寄ってきて、とことん甘えてくる癖がある。俺がもう中学生になるんだからやめてくれよ、と言っても聞かず、それで俺がキレて姉ちゃんを無視すると、「葉ちゃんが反抗期に突入しちゃった」とうなだれる始末。

俺と姉ちゃんはリビングで向かい合わせにテーブルにつき、朝食

を取った。

テレビをつけようとすると、「葉ちゃん、ご飯中はテレビ見ちゃダメ」とたしなめられる。

「いいだろ、少しくらい」

俺はまた姉ちゃんへの反抗精神に火が付き、テレビをつけた。

ニュースを見ると、昨日バラバラ死体が発見されたとのニュースが流れた。路上で、バラバラ死体が転がっているのを通りがかりの主婦が見つけたらしい。首が切断され、胸に大きな切り傷があるとのこと。

「最近は何騒だねえ」

姉ちゃんがたくあんをこりこり頬張りながら言う。

「姉ちゃんも、気をつけろよ。襲われないように」

「大丈夫よ、私は。得意の柔道で悪漢をやっつけてやるんだから」

「やっつけなくていいから、襲われたらすぐに逃げるんだぞ。姉ちゃんとりいんだから、闘ったりしたら絶対負けるって」

「ぶーっ、何よそれ。葉ちゃんの意地悪」

そんなことを話しながら、朝食を片づけた。

姉ちゃんと一緒に家を出る。扉を開けた途端に広がるのは、頭上を覆い尽くす背の高い木。膨大な敷地の中に埋め尽くされる砂利の地面。そして、古びた木の柱が目につく社。

ここは神社の境内だった。俺の家は神社の境内にあり、相当ボロな家に暮らしている。

扉を施錠すると、姉ちゃんが俺の腕を引いて、社に近づく。

姉ちゃんは制服のブレザーのポケットから熊のストラップがついた財布を取り出すと、中から五円を二枚取り出し、一つを俺に差し出してくる。

姉ちゃんが投げ込む。ちりん、と硬貨が箱にぶつかる音が鳴る。

俺も投げ込む。ちりん。

姉ちゃんは鈴を高く鳴らした後、妙にかしこまった様子で手の平を大きく叩き、目をつむって念じる。

「今日も、葉ちゃんとうんと甘〜い生活が送れますように」

「毎度ながら、何の願い事してるんだよ、姉ちゃん」

俺が白い目で言うのと、姉ちゃんは薄目を開けて、シツと唇に人差し指を突き立て、「お参りの最中は静かに！ 毎回言ってるでしよー！」とたしなめる。

俺はへいへいと言って、社に向き直り、鈴を鳴らし、手の平を叩いて合わせる。

今日も平和な一日が送れますように。それと。

姉ちゃんと、いつまでも元気に仲良く過ごせますように。

俺はそう念じると、目を開いた。すると、間近に姉ちゃんの顔があり、にこにこ笑いながらじつと俺を見つめているので、俺はぎよつとしながら「何だよ」としどろもどろになって言う。それでも姉ちゃんの端正な顔から目が離せずに、じつと姉ちゃんの目を見つめ返す。

「葉ちゃん、何の願い事してたの？」

「平和な一日が送れますようにって……」

「ほんとに、それだけ？」

姉ちゃんの追求に、俺はかあつと顔が熱くなって、間近にある姉ちゃんの顔から視線を逸らし、

「それだけだよ。悪いけど、姉ちゃんのことなんて、これっぽっちもお願いしてないから」

そう言ってしまった。

お姉ちゃんはどこか悪戯っぽく笑って、ふーんとその肉感的な唇を吊上げて、

「葉ちゃんが、私のこと、気遣ってくれてるかと思ったのに。残念だなあ」

とわざとらしく言って、背中て手を組んで歩き始める。

「なんだよ、その含み笑い。気持ち悪」

俺は姉ちゃんの背中に向けて言い放つ。姉ちゃんの肩がびくりと跳ね上がり、ぷくりと頬を膨らませた姉ちゃんが振り返る。

「何よ、気持ち悪って。ひどーい、葉ちゃん。姉さんのこと悪く言うなんて、いけないんだあ」

「姉ちゃんが俺をからかうからこうなるんだろ」

俺は姉ちゃんの横をすたすたと横切り、自分だけどんどん歩いていく。

「待つてよ、意地悪葉ちゃん」

「自業自得だ。俺はさっさと行くから姉ちゃんは五分後にここを出発しな」

「いやあよ。そんなことしたら、葉ちゃんと腕を組んで登校できないじゃない」

「しなくていいから！ そんなことしたら、目立つから！ ただでさえ俺たち顔似てないんだから、姉弟に見えないだろ」

「じゃあ、カップルに見えるって？」

無垢な笑顔で言われたその言葉に、俺はぎくりとしてしまう。俺と姉ちゃんがカップルとして腕を組んで歩いている様子を想像してしまったからだ。

「葉ちゃん？」

急に押し黙ってしまった俺に、姉ちゃんが眉をしかめながらじろ顔をのぞきこんでくる。

「あんまり顔近付けんよ、姉ちゃん」

「だって、葉ちゃん、変な顔してるんだもん」

そう言いながら、急に手を伸ばしてきて、俺の腕を取り、ぎゅっと腕を組む姉ちゃん。

「おわっ、何すんだよ！」

俺は慌てて姉ちゃんの手をつかみ、腕から引きはがそうとする。

「いいじゃない。このまま歩きましょうよ。私良いよ、葉ちゃんとカップルに見られても」

突然の言葉に、胸がどくんと一際大きく鳴る。いきなり何を言うんだよ、姉ちゃん。

俺は顔が耳まで真っ赤になるのを感じた。姉ちゃんは相変わらず

屈託のない笑顔で俺の顔をじろじろ見つめてくる。

純粹な愛情。いつもなら、はぐらかして終わりなのに、今は妙に意識してしまってるせいかな、姉ちゃんの愛情表現にどきまぎして変な気になってくる。

「いこ」

姉ちゃんは腕を組んだまま、神社の境内から出て、階段を降り出す。朝のお参りに来たらしい中年のおばさんが、俺たちを見て、にっこりとほえましそうに笑って見つめてきて、頭を下げてくる。

姉ちゃんがそれに対し、にっこりとした笑みで礼をり返す。俺も、しぶしぶ頭を下げる。

いつもと変わらない日常。だけど、そんなほのぼのとした時間の中で、胸の鼓動だけが忙しく音を刻み、静かに淡く切ない感情を肥大化させ、胸に広げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4594k/>

帝王の血

2011年10月5日02時25分発行